



洗足学園音楽大学



大学院リサイタルシリーズ⑦

～色葉散る午後～

2021年10月30日（土）15:00開演/14:40開場

会場：洗足学園音楽大学シルバーマウンテン1階

1. 宍戸 育実（ヴァイオリン） Pf. 田中 麻紀

L.v.バートーヴェン/ヴァイオリン・ソナタ 第1番 Op.12-1

2. 菅野 稚子（ヴァイオリン） Pf. 田中 真紀

P.チャイコフスキー/ヴァイオリン協奏曲ニ長調 Op.35 第1楽章

3. 府川 悠理（フルート） Pf. 井上 友美

平尾 貴四男/フルートとピアノのためのソナチネ

A.F.ドップラー/ハンガリー田園幻想曲 Op.26

⚠️ 新型コロナウイルス感染症の感染拡大を防ぐためのお願い

- ・マスク着用の徹底、こまめな手指消毒・手洗い・咳エチケットの励行にご協力ください。
- ・大声や対面での会話はお控えください。
- ・演奏者への声援はご遠慮いただき、拍手のみとしてください。
 - ・休憩時、終演後はスタッフが扉を開けるまでお待ちいただき、空いているドアから混雑を避けて入退場してください。
 - ・客席内やロビーでのご飲食はお控えください。
- ・出演者への面会はできません。出演者への花束・プレゼントもご遠慮ください。
 - ・万一、集団感染の発生が明らかになった際は、保健所に入場者の情報を提供する場合がございます。

主催：洗足学園音楽大学・大学院

1. 宍戸 育実(ヴァイオリン) 院1

L.v.ベートーヴェン/ヴァイオリン・ソナタ 第1番 Op.12-1

ベートーヴェン (1770-1827) のヴァイオリン・ソナタは第1番 Op.12-1 から第9番 Op.47 までが、1797年から1803年の7年間に集中して作曲され、約10年の時を経て第10番 Op.69 が1812年に作曲された。またそれ以前にも、演奏家として1795年にウィーンでデビューする少し前の20歳から24歳の間に、習作的なヴァイオリンと鍵盤楽器の為のデュオ作品をいくつか書いている。ベートーヴェンの得意とする楽器といえばピアノというのは有名であり、1792年にボンからウィーンに出てきた21歳の彼は、まずピアニストとして自らを売り出した。それと同時に、作曲家としてだけでなく演奏家としてベートーヴェンはヴァイオリンに精通していた。9歳からヴァイオリンを始め、後にヴィオラまで手掛けた彼は、18歳の時には地元ボンの歌劇場でヴィオラ奏者として活躍するまでになっている。このように演奏者として弦楽器の奏法を熟知し、作曲家として試作も重ねていたからこそ、最初期のヴァイオリン・ソナタから楽器の魅力を十分に引き出すことに成功したのは言うまでもない。最初の作品はウィーン宮廷楽長アントニオ・サリエリに献呈された Op.12 の3曲であるが、初版の表紙に「ヴァイオリンを伴った、クラヴィチェンバロまたはフォルテピアノの為の3つのソナタ」とあるように、伝統様式を踏襲したオブリガート・ヴァイオリン付きのピアノ・ソナタといった趣が強い。3曲共に急緩急の3楽章形式で書かれ、終楽章にロンド形式を用いている。

第1番 Op.12-1 ニ長調

第1楽章 ニ長調。4/4拍子のソナタ形式。ヴァイオリンとピアノが重音を *f* で堂々と鳴らして始まる。ピアノが音階を滑らかに弾き、ヴァイオリンは優美な旋律を歌う。続いて役割を交代し、ヴァイオリンが音階を担い、ピアノが3連符での旋律となる。掛け合いながら展開した後、イ長調の柔らかな第二主題がピアノで提示され、後半をヴァイオリンが続ける。

第2楽章 イ長調。2/4拍子。Andante con moto と示された主題と、4つの変奏から成る穏やかで優しい主題はピアノのみで始められ、次いでヴァイオリンが模倣してゆく。第一変奏はピアノが主でヴァイオリンが装飾的な役割をしている。第二変奏では役割が逆転し、第9番のソナタ「クロイツェル」の変奏を思わせる楽想が展開される。第三変奏ではイ短調に転調し、切迫感をもってドラマティックに駆け上がり、最後の第四変奏はイ長調に戻り、平穏さを取り戻す。

第3楽章 ニ長調。6/8拍子のロンド形式。軽やかでリズムカルなピアノのロンド主題から始まる。ヴァイオリンによる短いイ長調部を挿み、最初の主題に戻る。その後なだらかな旋律が美しいへ長調部に移行し、最後にコーダとなる。

♪ profile ♪

栃木県出身。5歳より才能教育研究会（スズキ・メソッド）でヴァイオリンを始める。これまでにヴァイオリンを川沼文夫、栗原りか、水野佐知香、近藤薫、ヴィオラを大野かおる、古川原裕仁、室内楽を安藤裕子、川田知子、須田祥子の各師に師事。2018年より現在まで安永徹・市野あゆみ両氏による講座「ヴァイオリンとピアノによるデュオ」の特別レッスン生。洗足学園音楽大学弦楽器コース首席卒業。



2.菅野 稚子(ヴァイオリン) 院2

P.チャイコフスキー/ヴァイオリン協奏曲ニ長調 Op.35 第1楽章

チャイコフスキー(1840-1893)の協奏曲で、最初に書かれたのは、有名なピアノ協奏曲だが、それが完成された1874年の暮れ、当時を代表する名ピアニストであり、モスクワ音楽院の院長でもあったニコライ・ルビンシテインに献呈し、初演してもらうつもりで、この親しい同僚を訪ねたところ、「演奏にも値しない価値のない代もの」と酷評されてしまった。チャイコフスキーがこのヴァイオリン協奏曲を書き上げたとき、当時のヴァイオリンの第一人者とされていたレオポルド・アウアーにこの曲を捧げ、その初演を依頼する目的をもとに持参した。ところが、アウアーはこれをはっきりと演奏不能と断定した。前に作曲したピアノ協奏曲のケースとまったく同様の羽目におちいったのである。

ドイツ系のアドルフ・ブロッキーという、当時ライプツィヒ音楽院の教授をしていた演奏家がいた。ブロッキーは1881年11月22日ウィーンで、ハンス・リヒターの指揮のもと、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の演奏会で、このコンチェルトを初演した。しかし、指揮者も含めて、オーケストラのお座なりの演奏のせいもあってか、聴衆の反応も鈍く、批評も手厳しいものがあったという。しかし、演奏したことによって、曲の真価をはっきりとみてとったブロッキーは、機会あるごとにこの曲をとりあげて演奏し、ヨーロッパ各地で作品にたいする高い評価を導き出すことに成功した。アウアーものちに前言をひるがえし、進んでこの曲を演奏するようになり、このジャンルにおける代表的な名曲の一つとしての位置づけが確立されていくことになった。曲は当然ブロッキーに献呈されている。なお1879年にブロッキーより早く、ニューヨークで、ダムロッシュの手で演奏されたともいわれるが、その詳細は定かではない。いずれにせよ、この協奏曲が広く認識されるようになったのが、ブロッキーの力によることはいままでもないところであろう。

第1楽章 序奏をもつソナタ形式。序奏部はアレグロ・モデラートで、意味あり気に語りかける第1ヴァイオリンの序奏主題にオーケストラが合いの手をいれる形で始まる。しだいに盛りあがって頂点に達して、力を抜いて弱く落とすと、独奏ヴァイオリンが登場する。初めは無伴奏で短くカデンツァ風のアイングングのあと、モデラート・アッサイのソナタ主部に入る。独奏ヴァイオリンはのびやかな旋律の第1主題をだし、オーケストラが弱く伴奏する。この主題を独奏ヴァイオリンが中心になって華やかに繰り広げてゆき、ひと段落したところで、叙述的な第2主題をイ長調で出し、独奏ヴァイオリンがなお一層派手に広げる。

展開部はオーケストラだけで第1主題を堂々とひろげるところから始まって幻想的に華やかに進み、その途中から独奏ヴァイオリンが出て、はなやかに展開をつづけ、もう一度オーケストラだけで豪壮に第1主題を展開してから、作曲者自身の作った独奏ヴァイオリンのカデンツァになる。

これで展開部が終わって再現部に入り、第1主題はオーケストラと独奏ヴァイオリンとで弱くでてからしだいに幅広く力を加え、やがてふたたび前のように第2主題が今度はニ長調で出る。

♪profile♪

千葉県出身。11歳よりヴァイオリンを始める。洗足学園音楽大学弦楽器コースヴァイオリン専攻卒業。

フェデリコ・アゴ스티ーニ氏の来校時に特別レッスンを受講。これまでにヴァイオリンを磯恒男、水野佐知香の各氏に、ヴィオラを安藤裕子、大野かおるの各氏に、室内楽を物集女純子、須田祥子、安藤裕子の各氏に師事。



3.府川 悠理(フルート) 院2

平尾貴四男/フルートとピアノのためのソナチネ

平尾貴四男は(1907-1953)東京・日本橋の裕福な家庭環境に生まれた。幼少期からピアノ、作曲を学び、慶應義塾大学を卒業した翌年1931年から5年間に渡りパリに留学し作曲法と対位法、フルートをガストン・クリューネルに学んだ。作曲者の初期の作品に挙げられるこの作品は大蔵喜七郎男爵の発明である縦笛楽器オークラウロを念頭に作曲され、フルート用に補筆されたものである。時代が戦争への歩みを強めていった1941年に作曲されたことを考えると、自由な音楽活動が制限されていく社会において日本人としてのアイデンティティを強く意識しながら作曲したのではないかと思う。1楽章は五音音階に基づいた日本音楽とフランスで学んだ和声の技法が融合し、色香漂うような旋律が続く。2楽章は篠笛と箏の合奏を思わせるような生き生きとした旋律で盛り上がりの中で終わる。

A.F.ドップラー/ハンガリー田園幻想曲 op.26

フランツ・ドップラー(1821-1883)はポーランド系ハンガリー人として生まれた。フルート奏者として19世紀を代表する名手であり、フルートのための作品を数多く残した。この作品の作曲年、動機について詳細は不明である。ハンガリーはヨーロッパ諸国の中にありながらアジア系民族にルーツのある国である。曲は3部で構成され、チャルダッシュの様式が取り入れられている。第1部は日本フルート協会名誉会長の故吉田雅夫氏いわく、冒頭部は日本の馬子唄に通ずるものがある。そのため遠い異国の作曲家の曲ではあるが、どこか東洋的で親しみを感じる旋律である。第2部では長調に転じ、タイトルの通り田園を思わせる明るい雰囲気となり、活気を増していく。第3部はハンガリーやジプシーの音楽のリズムが緩急巧みに交代しながら目まぐるしく展開し、クライマックスに達して幕を閉じる。



♪ profile ♪

神奈川県藤沢市出身。12歳よりフルートを始める。洗足学園音楽大学管楽器コース卒業。韓国にてイ・ソヨン氏のマスタークラスを受講。これまでにフルートを塩谷 信洋、山田 くに子、荒川 洋の各氏に師事。室内楽を菅井 春恵、上野 由恵の各氏に師事。